

## 「何と幸いなことでしょう」

主任司祭 晴佐久 昌英

クリスマスは、ぼくにとっては受洗記念日でもある。51回目の記念日となる今年もまた、キリストの洗礼を受けた者として降誕祭ミサを捧げることになる。感謝以外に言葉はない。

受洗したのは東京の本郷教会で、授けたのは水谷九郎師である。師は1907年生まれ、2004年に97歳で亡くなった。伝説的な碩学であると同時に深い靈性に恵まれ、晩年は毎朝ベッドの上でミサを捧げていた。

司祭に叙階される時、師に挨拶状を書いた。このたび叙階の日を迎えることとなりました、それもこれも神父様のおかげです、と。その時ふと、師なら何と言うか気になり、その頃の自分の正直な思いをぶつけてみた。

それは、神秘主義への憧れである。

当時、ぼくは神秘主義に惹かれていて、そんな研究ばかりしていた。神秘主義とは、ひとことで言えば神の直接体験のことである。その数年前、信仰の闇に閉ざされていた時、ある夜小さな神秘体験をして決定的に救われたことがあり、以来興味を持って古今東西の神秘主義を渉猟し、神の直接体験を極めようとしたのである。

そうでなくとも神学生時代は理性偏重の神学に対する懐疑心があり、神学校の姿勢や教会組織への反発心もあって、学問だの組織だのを介在せずに神を直接体験する神秘主義の純粹さに救いを求めていたのだと思う。

そんな思いを書き綴った手紙に、程なく返事が来た。それはいわば当たり前の内容でありながら、理屈を超えた生きた言葉として衝撃的に響いた。

「神秘主義は神の自己啓示として大切ですが、イエズス様こそ至高の啓示であり、イエズス様は終末の先取りとしてすべてを弟子に受け継がせられたので、私は、いま、ここで、いつも、神のみこころのままに、イエズス様と共に聖霊によって生きています」

「イエズス様は最後の晩餐で命の血の契約を交わし、弟子にぶどう酒を飲めと言われ、自分はもはや飲まない。これは、ミサで私が飲むとき、今もキリス

トと食を共にするということ」

「だから私はいつも十字架の道を歩きます。そうして、命は父と子と聖霊によって永遠に続きます。何と幸いなことでしょう、神のなさることは」

イエス・キリストにおける至高の啓示の絶対性と、それを受け継ぐ教会の完全性を心底信じ、宣言する一人の司祭。自分も主の晩餐に居合わせたかのように感動し、主と共に誇り高く生きる真の弟子の存在に、目が覚めた。

真の弟子との出会いは真の師との出会いであり、それこそが、神の直接体験なのだ。もう他に何もいない。

そうして信仰は永遠に受け継がれ、今年も降誕祭のミサが捧げられ、信じる者に生ける神が宿る。何と幸いなことだろう。神のなさることは。